

2025 年度

国府台女子学院 中学部

第 2 回入試

国 語 (50 分)

**【注 意】**

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
3. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、  
だまって手をあげ、先生にたずねてください。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。

注意Ⅱ句読点や記号もそれぞれ一字と数えます。

□ 次の各問題に答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① ケツキ盛んな若者。
- ② シヨシを貫く。
- ③ シケンを述べさせていただきます。
- ④ 祖母のシンペンの世話をします。
- ⑤ そろばんを弾いて答えを出す。

問二 次のような和歌があります。この和歌の中の「身をしる雨」とは雨のほかに何を表すものと考えられますか。あとの大意を参考にして、ひらがな三字で答えなさい。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

(大意) あなたの気持ちがわからず、私の不安や悲しみはどんどん深くなるばかりです。

問三 次の①～③の意味を全て持つ漢字一字をあとのア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

- ① あてにする
- ② 約束する
- ③ 一定の時間

ア 頼      イ 想      ウ 周      エ 期

問四 次の空欄に入る言葉として最も適当なものを次のア～カから一つ選び、記号で答えなさい。

□知らぬ顔をして通り過ぎた。

- ア そ      イ か      ウ ご
- エ さ      オ お      カ もの

問五 次の空欄に入る言葉として最も適当なものを次のア～カから一つ選び、記号で答えなさい。

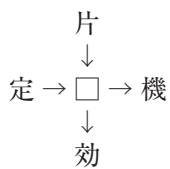
【      】今日は好調だ。

- ア あたかも      イ あながち      ウ いささか
- エ おもむろに      オ つくづく      カ とりわけ

問六 次の——線部の敬語の使い方が正しければ○、まちがっていれば正しい言葉を書きなさい。

ぜひ、当店の料理を召しあがってください。

問七 矢印の方向に読んで二字熟語になるように、空欄に入る漢字一字を答えなさい。



問八 次の空欄に共通して入る漢字一字を答えなさい。

【一】の知らせ 【二】の息 【三】の居所が悪い

問九 釣りの用語で、( ) という語があります。魚が一匹も釣れずに終わる時に用いられる語ですが、( ) という語を使う理由については諸説あるようです。

- 1 毛が一本も生えていない様から
- 2 無駄な殺生をしないから
- 3 もう毛がない(儲けがない)から

これら諸説の由来から( )に入る適切な語をひらがな三字で答えなさい。

問十 次のア、イの——線部のうちどちらの言葉が正しいか。正しい方を選び、記号で答えなさい。

- ア 賛成が過半数を超えた。  
イ 賛成が過半数を占めた。

問十一 「やるせない」という言葉を使って二十字以上三十字以内で短文を作りなさい。「行く↓行かない」のように、形を変えてもかまいません。また話を通じれば主語がなくてもかまいません。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ちゃんとしなさい。娘と接する時、もつとも多く口にする言葉かもしれない。ちゃんとしなさい。自分の母親からもつとも多く言われた言葉でもある。ちゃんとしなさい。昨日も言った。言いたくないのに、口から勝手に飛び出す。言ってからすぐく嫌な気持ちになる。自分がされて嫌だったことを、自分の娘にやっている。でもわからない。他の叱りかたがわからない。

「ちゃんとしなさい」の「ちゃんと」が、子どものわたしはいつもわからなかった。どうすれば「ちゃんと」している状態なのか、母は具体的に指示してはくれなかった。

いつも母の顔ばかり見ていた。母が I ばそれは即ち「ちゃんとしていない」ということだから。

結が生まれて、母は週に二度、うちに来るようになった。母は「ちゃんとしなさい」と、結にはけっして言わない。結ちゃん結ちゃんと、<sup>①</sup>角砂糖が溶け落ちるような声で呼ぶ。 II て、欲しがるままお菓子を与える。

「お夕飯が入らなくなるから、もうだめよ」とお菓子を取り上げると、結は泣き叫ぶ。 III で、わたしを睨みつける。結は身体が小さい。早生まれであることを考慮してもなお、小さい。身長だって体重だって、同じ年齢の子どもの平均値から著しく外れている。お菓子ばかり食べているからだ。

その夜、あんのじょう結はぐずぐずと文句を言って、夕飯を食べようとしなかった。焦げ目のついた秋刀魚が、皿の上でどんどん冷めていく。

旬の食べものはおいしただけでなく栄養価も高いのです。食育の本にそう書いてあった。仕事を終えた重たい身体を引きずって、あかつきマーケットの鮮魚店で買ってきた秋刀魚なのに、結は「いらぬ」と首を振る。無理やり口をこじ開けて食べさせたら、結はぺっとそれを吐き出した。唾液の絡ん

だ白い秋刀魚の身が、床の上に落ちる。

「結ッ」

叫ぶと、結が返事をする前に夫が顔を上げた。キンキン声出すなよ、と肩をすくめる。

「キンキン声なんか出してない」

出してたって、と言いながらまた夫は卓上のスマートフォンに視線を戻す。結に示しがつかないからやめてくれと何度も言っているのに、夫は食事をしながらスマートフォンを弄るのをやめない。別に変なものは見えていない、ニュースサイトを見ているんだ、などと言いわけをするけれども、どうでもいい。なにを見ているかなんて訊いてない。

「なあ、俺仕事終わってやっと帰ってきたんやで。ゆっくり飯食いながららんびりスマホ見るぐらい許してくれよー」

ねー結ちゃん。呑気にえへらえへら笑いながら娘の顔をのぞきこむ夫の胸ぐらを掴んで「わたしは？」と叫んでやりたい。ねえ、わたしは？ わたしだって仕事をして帰ってきた。でも「ゆっくり」ご飯を食べたことなんて、結が生まれてから一度もない。離乳食の頃はもとより、自分でフォークを使って食べられるようになった現在だって、食べもので遊ぶとか食事椅子から降りるなどか、しょっちゅう注意をし続けなければならぬ。

家の中はもうわたしにとって「のんびり」できるような場所ではなくなっている。それなのにあなただけがどうして「ゆっくり」「のんびり」を享受しているの？

「だいたい、そんなむりやり食べさせて好き嫌いがおぼろげにやんか」残さず食べるとは言っていない。ひとくちだけでもいいから食べてみて、それから判断することを教えたい。食べてみてどうしても苦手だと言っなら、しかたないと思っている。はじめから食べもせず「いらぬ」「おいしく

ない」と決めつけられた料理たち。わたしがつくった料理たち。手つかずの料理がのった皿をゴミ箱の上で傾ける悲しみを、夫は知らない。

「わかった、じゃあ俺が食べる」

子どもみたいにぶんとむくれて結の皿を引き寄せる夫は、<sup>②</sup>なにもわかっていない。

「そういう問題なん……？」

好き嫌いを許すと苦勞する。ただでさえひとりっこはわがままに育つと言われている。ちゃんとしっかり育てなければならぬ。そう言ったのは夫の母だ。

そういう問題じゃあ、ないのに。顔を覆うわたしの肘を、結が「まー、ねー、まー」と揺さぶる。

もうちょっとおおらかに子育てができないものかねえと、いつだったかわたしの母が夫に話しているのを聞いた。余裕がないんですよね、ママ友でもできればちょっとは違うのかもしれないですけど、と夫は答えていた。

ママ友なんていらぬ。ちっとも欲しくない。

Red

Blue

鮮やかな色のボードを掲げて、英国人の講師がびよんびよん跳ねる。子どものかたまりも笑いながら、それに倣う。イエー、というような声も上げる。なにがイエーだ。母親のかたまりが笑いさざめく。<sup>③</sup>

動かない結の隣に、とうとう保育士が立った。ほら結ちゃんも、と促されて、結は首を横に振る。一度いやだ、と思ったらあの子はもう動かない。三歳の運動会の時だってそうだった。入場行進で、保育士に引きずられるようにして行進する姿を見て、恥ずかしさのあまり声が出なかつた。

とこととここ、とこちらに歩いてくる子どもがいる。ひろふみくんだ。サ

エキさんは、母親のかたまりからすこし離れたところに立っていた。

サエキさんがひろふみくんに歩み寄る。Orangeと言う講師の声にかぶせるようにサエキさんがいきなり「オレンジ！」と叫んだ。カタカナ的な発音だった。母親のかたまりから、曖昧な笑い声がこぼれる。

サエキさんはひろふみくんの手を引いて、スキップするようにして子どものかたまりに近づいていく。誰よりも大きな声で色の名前をフクシヨウしながら。ブルー、というかたちにはひろふみくんの唇が動くのが見えた。

「……その時によるかなあ」

サエキさんが手をつくくと、グラウンドに敷いたシートが、かさりと音を立てる。結とひろふみくんは年中さんの組になって、帽子の色が変わった。「あかつきはいくえん うんどうかい」という看板を縁どるうす桃色の花は、ふたつばかり失われている。倉庫から運んでくる途中で外れてしまったのかも知れない。すこし離れたところで、あかつきマーケットのマスケットであるあかつきさんが園児に囲まれていた。サエキさんがちらっと見て「大人気だね」と感心したように頭を振った。

一年前の運動会は、そんなふうにはじまった。

夫が出張で、わたしの母も義母も体調がおもしろくないとかで、運動会を見に行けたのはわたしひとりだった。朝「なんでママしか見に来てくれへんの」とぐずる結を宥めるのにひと苦労した。到着すると、サエキさん夫妻が先に来ていて「ひとりなの？ 大きいビニールシート持って来ちゃったから、よかったら一緒に座らない？」と声をかけてくれたのだった。

「その時による、なんや」

先ほどのサエキさんの言葉は、わたしの「ひろふみくんって、食べものの好き嫌いある？ 食べたくないうって言った時、どうしてる？」という問いを

受けてのものだった。

最近、わたしがサエキさんとよく話すようになったことを知った夫は「やつとママ友できたんや」と喜んでいたら、わたしはサエキさんのことを「ママ友」だとは思っていない。サエキさんはあくまでもサエキさんだ。「ひろふみくんのママ」ではなく。

誰くんや誰ちゃんのママと呼ばれることを良しとする人たちはわたしにとって、依然としてひとつのかたまりだった。どうして平気なのだろう、自分の名を背負って生きてきたこれまでをどう感じているのだろう。

どうして、誰かの母親であるという事実を自分の存在そのものにしてしまえるのだろうか。子どもは、たしかにかわいい。夜中や朝方、かすかに唇を開いて眠っている結を見る時、愛おしさに胸がつまる。もしこの子が何らかの理由でいなくなったらとか、離れて暮らすことになったらとか、考えるだけで涙が出る。

自分の子どもはかわいい。あたりまえだ。けれどもこれからの時間をすべて結のためだけに使えと言われたら、わたしはきつと死ぬ。わがままなのか④ ④ 母親のかたまりには、そのようなわがままがグラムもふくまれているように見える。

いつも笑顔でいることが母親の役目。それぞれが心から、常にそう思っている⑤ ⑤ ⑤ サエキさんはかたまりじゃない。かといって、孤立しているわけでもない。

にこやかにあいさつを交わしたり、時には世間話をしている姿も見かける。けれどもひとりだけ、違う。

サエキさんは真摯だ。なにかの行事の時にも、毎日の送迎の際に他の子どもに話しかけられて答える際にも、いつでも。真摯な人はきれいだ。

「ひろふみも全然食べない時あるよ。食べない時はどうやっても食べないか

ら、サツとお皿下げちゃったり、ずるい手だけど後でアメ食べてもいいよっ  
ておやつで釣ったり、色々」

保育園の給食はぜんぶ食べてるらしいから、まあいいかって、とサエキさ  
んは平気な顔をしている。

「まあいいか、なんや」

サエキさんは、いやわかんないよ、育児の常識に照らし合わせていいこと  
かどうかはわかんないけど、わたしはそうしたいからそうしてる、と答えた。

「サエキさんって子どもの相手してて苛々したりすることないの」

「あるよ。いっぱいある」

続いては、年中さんのダンスです、とマイクごしに保育士が言う。心臓が  
びくと跳ね上がる。結はちゃんとできるだろうか。拍手をしながら、結を  
目で追う。ダンスの時に手首につけるお花の飾りがすごくかわいいのだと結  
ははしゃいでいた。だからたぶんだいじょうぶ、ちゃんと踊ってくれるはず。  
音楽が流れ出す。つたない動きながらも確実に振付をこなしているのを見  
守る。ダンスが上手な子は前列に並んでいて、結は後列にまわされている。  
親の目から見ても決して上手ではない。でも、踊っている。うつむいたり泣  
いたりしていない。良かった。涙がこぼれそうになる。なんて楽しそうに笑っ  
ているんだろう。結。結、がんばれ。

子どもの頃、わたしは運動会が嫌いだった。踊りがへただったり、走るの  
が遅かったりすると、母は露骨にがっかりした顔をした。

あはは、とすぐ隣でサエキさんとその夫が笑う。ひろふみくんがほーっと  
した顔で、地面を見ていた。まったく踊っていない。

「ひろふみ、キョウチヨウセイゼロだね」

どうしておもしろがれるんだろう。自分の子どもが、ちゃんとしていない  
のに。

「たぶん、あれに見とれてるんだよ」

サエキさんがひろふみくんの足もとを指さす。はりめぐらされたビニール  
製の万国旗は半透明で、グラウンドの砂に青や赤の色を落としていた。それ  
がきれいだから見ているのだろうと。

「……運動会ってなんで万国旗なんだろうね」

ほんとうはそんなことどうでもよかった。でもなにか違うことを言わなけ  
れば、「自分の子どもがちゃんとしてないのに、なんでそんなに平気でいら  
れるの」という質問をぶつけてしまっただった。

「なんでだろうねえ」

ダンスを終えて退場する子どもたちを拍手で見送って、サエキさんは首を  
傾げた。

「世界にいろんな国があるみたいに」

サエキさんがずっと万国旗を指さした。細くて長い、きれいな指だった。

「いろんな子がいますってことなんじゃない」

いろんな子、とサエキさんの指さす方向が、むこうの園児のかたまりに移  
る。いろんな人、と今度は保護者席を指さした。

ひとりひとり違うんだよ。きっぱりと言って、サエキさんはわたしの顔を  
のぞきこんだ。見透かされている気がした。すこし、こわかった。

万国旗は今年も、風にはためく。きれいな色が砂に落ちる。園児の入場で  
す。マイクごしに、はりきった園長先生の声が響いた。

「ええー、そうなん？ がっかりー」

すこし離れたところで、保護者たちが騒いでいた。あかつきん、という単  
語を耳が拾う。

どうやら、今日の運動会に呼ばれていたはずのあかつきんがなんらかの理  
由で来られなくなったらしい。

去年の運動会にも、そういうえば来ていた。どうせ向こうは宣伝の一環としてやっているのだから、それでも子どもたちは喜ぶ。「がっかり」と言いなくなる気持ちはわからなくもない。

「イベントの後に失踪して、まだ見つかってないらしいよ」

失踪、という言葉に、ちよつと笑ってしまった。なんだか、おおごとだ。口もとを押さえるわたしを、隣の夫婦がちらりと見た。

もも組、と書いたプラカードを掲げた結が、先頭を歩いてくる。年長クラスの子どもは、小さいクラスの子どもを先導して歩くことになっているのだ。三歳の頃保育士に引きずられて歩いてきた結は今、頬をかすかにコウチヨウさせ、ほこらしげに前を向いて行進していく。ほんとうは行進の時は、足はもつと高く上げたほうがいい。背筋ももつとぴんと伸ばしたほうがいい。でも、そんなことはもうどうでもいい。

ゆいー、と呼んで、手を振る。結はこつちを見て、すこし恥ずかしそうに笑った。

サエキさんは、もういない。

去年の運動会の最中、サエキさんは言ったのだった。

「再来月に、引越すことになったんだ」

夫の仕事の都合で、とサエキさんは続け、サエキさんの夫がなぜかとてもすまなそうに、わたしに向かつて会釈をした。

「どこに引越すの」

イギリスの、とサエキさんが言い、わたしは、イギリスの、と復唱した。

「リヴァプール」

リヴァプール、とまたばかみたいに繰り返して、それから、あのビートルズの出身地の、と続けた。

「そう、ビートルズの」

ビートルズの出身地、ガリヴァプールについての全知識だったので、それ以上会話は続かなかった。

二か月後、サエキさん一家は、日本を発った。

うわーっという泣き声で、はっと我に帰る。四歳児クラスの男の子が、先生に引きずられるようにして行進している。顔を真っ赤にして男の子が泣き叫ぶと周囲からくすくすという笑い声もれた。

「もういや」と隣にいた保護者が呟く。そうか、この人があの男の子のお母さんなのだ。

「もういやや、恥ずかしいわ」

なぜ他の子みたいにできないのかと、お母さんは泣き出しそうになっている。あいつ甘えん坊やからなとお父さんらしき人も困り顔だ。

「あの」

たまらず呼びかけた。

「うちも三歳の時、あんな感じでしたよ」

いやもつとひどかったかも、と、数年前の結を思い出して、笑い出してしまふ。

「でも今は、それなりに」

すでに行進を終え、グラウンドの中央で足踏みを続けている結を指さした。そうなんですか、と若いお母さんは、目を見開く。その驚きは、泣いてどうしようもなかった子どもがあんなふうにな、というものではないように思われた。たぶん突然言葉を発したわたしという存在そのものに対してびっくりしている。

もしかしたらこの人の目に、わたしもまた母親のかたまりの一部のようにうつっていたのかもしれない。

「その時は『なんでもうちの子だけ』って思ってたけど、いつのまにかちゃん

とできるようになって。子どもってそんなもんなんでしょね」

えらそうに聞こえてしまったら嫌だけど、でも言いたかった。そんなもんだから気にしなくってもきつとだいたいようぶだと。サエキさんみたいにさらりと、でも真摯に伝えられたらいいのに。

「そんなもんでしょか」

夫婦で顔を見合わせて、同時にふつと息を吐く。

「ありがとうございます。……シラカワさん」

シラカワユイ、と娘の名を書いたビニールシートに視線が注がれて、わたしの名字を呼ばれる。

「清水といいます」

男の子の両親は、ふたりそろって、頭を下げる。清水さん。口の中で繰り返す。お母さんのほうの清水さんは「駅の中のジューススタンドわかります？ 私そこで働いてて」と、ジュースの三〇円引き券を一枚くれた。

「ありがとうございます」

なくさないように、財布の中に入った。お父さんのほうの清水さんは「いきなり宣伝すんなや」と呆れていたけど、わたしはなにか、とてつもなく良いものをもたらしたような気がした。

強い風が吹いた。砂埃が目に入らないように、ぎゅつと目をつぶる。目を開けたら、眩しくて一瞬くらっとした。

最後に会った時、サエキさんは「元気でね」とわたしに言った。泣きそうなのをがまんするのに必死で、「サエキさんも元気でね」というつまらないひとことしか返せなかった。言いたいことがいっぱいあったのに、連絡先を訊ねるだけで声がふるえてしまって、すぐくかっこわるかった。

「うまくやっていけるかなあ」

長くも深くもなかったわたしたちの関わりの中でサエキさんがただ一度だ

けこぼした、ヨワネらしきものだった。

もつといっぱい聞きたかったよ、サエキさん。ふたたび目をつぶる。弱音でもなんでも、いろんな話をもつといっぱいしたかった。

リヴァプールについて、あれからいろいろと調べてみた。治安はどうなのか。気候はどうなのか。友だちが住む遠い街が、素敵なところでありますようにと願いながら。

日本との時差は、八時間。腕時計を見る。リヴァプールは今頃きつと、夜明け前だ。あとでサエキさんにメールを送ろう。一歳児クラスの親子競技のはじまりを告げる音楽が、にぎやかに流れ出した。

(寺地はるな『夜が暗いとはかぎらない』ポプラ社)

問一 —— 線部 a ~ d の漢字の読みをひらがなで書き、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 

I	く	III
---	---	-----

 に入ることばとして最も適当なものを次のア~コからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、選択肢はすべて言い切りの形になっている。

- |   |        |   |        |   |        |
|---|--------|---|--------|---|--------|
| ア | 頭をひねる  | イ | 固唾を呑む  | ウ | 手を焼く   |
| エ | 地団駄を踏む | オ | 眉をひそめる | カ | 目尻を下げる |

問三 —— 線部①「角砂糖が溶け落ちるような声」とあるが、このような声のことを「□撫で声」という言葉で言い換えることもできると考えられる。□に入る動物として最も適切なものをひらがなで答えなさい。

問四 — 線部②「なにもわかっていない」とあるが、どんなことがわかっていないのか。その内容として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手作りの料理を娘が手つかずで残してしまい、その料理を捨てなければならぬわたしの無力さ。

イ わたしに対しては厳しくしつけをしてきたが孫に対しては甘く、子育ての悩みをわかってくれない母への恨み。

ウ 娘のしつけや成長のために子ども第一の生活をする中で心の余裕がなくなっているわたしの苦勞。

エ 妻の現在の生活はママ友ができることでよい方向に変わるだろうと単純に考える夫へのいらだち。

問五 — ③にはこの状況での「わたし」の気持ちが反映された語が入る。

次のア～エより最も適切なものを一つ選び記号で答えなさい。

ア それ今のタイミング？

イ なにがおかしい。

ウ でもなんか楽しそう。

エ わたしも楽しもう。

問六 — 線部④「母親のかたまり」とはどういうもののことだと主人公は

考えていると思われるか。文中の内容に合わないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもの前で笑顔でいることが母親の役目であると考え、一人一人の子どもの個性を認めることのできる集団。

イ 自分らしい生き方を貫くよりも子どもの成長を第一に考え、主にそ

こに生き甲斐を見いだす集団。

ウ 子どもがごく一般的に成長していけるように育児の常識にしたがって行動し、その枠から外れることをためらう集団。

エ 他者を「うちのママ」という観点から捉え、その個人の人格には関心を向けない集団。

問七 — 線部⑤「サエキさんはかたまりじゃない」とあるが、「わたし」

がそのように考えるサエキさんの様子としてあてはまらないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ささまざまなタイプの子どもがいることに理解を示し、自分の子どものような行動であっても否定しない様子。

イ 自分の子どもが他の子どもと違う行動をとっても、適切な導き方で同様の行動ができるようしつける様子。

ウ 他のママ友とは異なる奇妙な行動であっても、自分の子どものためには潔く行動する様子。

エ 自分の子どものいたらない点や育児の常識からはずれたことでも隠さず伝え、堂々としている様子。

問八 — 線部⑥「見透かされている気がした」とあるが、どんなことを「見

透かされている気がした」のか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本当は「母親のかたまり」の一員となり、ママ友仲間を作りたいと思っていること。

イ 自分の子が周囲の子と同じような行動をとれているかをいつもひどく気にしていること。

ウ 自分の子がきちんとしていないのに平気でいられる理由を知りたいと思っていること。

エ 本当は、子どもが悪目立ちせず皆と同じようにダンスを終えられて安心していること。

問九 本文中にはサエキさんの影響を受けて主人公の気持ちが少し変化したことを示す部分がある。娘に対する思いを通じてそれが読み取れるひと続きの三文を探し、最初の七文字を書きぬいて答えなさい。

問十 ——線部⑦「同時にふっと息を吐く」とあるが、このときの感情として最も適当なものを次のア～カから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あきらめ                   イ 安堵<sup>あんど</sup>                   ウ 不安  
エ 疑い                       オ 緊張                   カ 動揺

問十一 ——線部⑧「わたしはなにか、とてつもなく良いものをもらったよ  
うな気がした」とあるが、どうしてこのような気持ちになったのか。最  
も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分のアドバイスを素直に聞く清水さんとはこれからもさらにアド  
バイスしていきながら仲良くなれそうだと感じたから。

イ 清水さんからジュースの三〇円引き券をもらえたことが素直にうれ  
しく得した気分になったから。

ウ 「なんでうちの子だけ」と恥ずかしがる清水さんを見てかつての自

分と同じような人があることを知り安心したから。

エ 思いがけず自分と同じような考え方をする清水さんに出会え、その  
彼女に適切なアドバイスができたと思ったから。

問十二 この文章を読んだ後に、A～Fの5人の生徒が次のような意見や感  
想を述べました。本文の記述からは明らかに考えられない内容を含  
むものを次のA～Fの記号より一つ選び、記号で答えなさい。

A この主人公の女性は子育てに奮闘<sup>ふんとう</sup>しているのに思ったように娘が  
育ってくれず、それに加えていわゆるママ友とされる人たちとも仲良  
くできなくて孤独感<sup>こどく</sup>を深めていたんだね。思い切つてママ友の中  
に入っていけば、彼女たちとも仲良くできたかもしれないのに残念。

B だけど、彼女もそれぞれの母親たちのことをひとつの個性として捉<sup>とら</sup>  
えず、ママ友と一括<sup>ひとく</sup>りにして偏見<sup>へんけん</sup>を持っているよね。だからママ友か  
ら疎外<sup>そがい</sup>されて余計に孤立しているんだよ。みんなと同じように子育て  
できるママ友へのひがみや憎しみもあるんじゃないかな。

C そうね、翌年になって、自分の娘が他の子と同じようにきちんと行  
動できるようになっていたことを誇<sup>ほ</sup>らしく感じ、それで、それを清水  
さんにアドバイスするあたりは、本心では、この主人公も我が子がみ  
んなと同様に行動できることを望んでいたんだなと思っちゃう。

D いわゆる同調圧力<sup>どうどうあつり</sup>がよく言うけど、これに対して強く違和感<sup>いわ</sup>を感  
じたり、反発したりするのは結局、同調するのが難しいからこそなん  
だろうね。そして、その根底には同調できない自身への不安がどこか  
に潜<sup>ひそ</sup>んでいるのかもしれない。

E 確かに、前半部のこの主人公からは何かしらの不安定さを感じるよ

ね。でも、自分の娘と同様に周囲と同じような行動をとらない子供がいるのに、堂々としているサエキさんを見て憧れあこがが強くなり、後半部は考え方も変わって自信がついた様子がわかるよ。

F 本当にサエキさんってすごい人だね。自分というものをきちんと持って、自分らしく子育てをしている。でも、そんなサエキさんもうギリス出発の際には不安を口にしてるよね。結局、どんな人でも何かしら周囲や他者を気にして生きてるんだってことを気づかされるお話だったと思う。

